

HITA

PRIDE

PROJECT

日田 #02

日田は「ヒト」でできている。

[HITA / HITO] HITA PRIDE PROJECT

日田を愛し、
日田に生きるヒトたちの
ストーリー！



日田

HITA
PRIDE
PROJECT

#02

日田

HATA

PRIDE

PROJECT

日田を愛し、
日田に生きるヒトたちの
ストーリー。

高いビルはないけれど、豊かな緑がある。

夜の明かりは少なくても、夜空に数多の星がある。

人は多くないけれど、

さりげなく声を交わせる人がいる。

何気ない日常の中で、熱をもって、

日田に生きる人たちがいる。

今日も日田には、豊かさを纏ったストーリーが、
風のように流れている。

そして日田は、日田を愛する人たちで
つながっている。



本野 雅幸

〈35〉

自分に合う職が見つかるまで、
焦らずマイペースに探せ



MASAYUKI MOTONO

1981年生まれ。日田林工高卒。日田へ戻り、医療事務や市の臨時職員などを経て家業を継ぎ、下駄職人に。父、母、妻と4人で「本野はきもの工業」を営む。布を貼りコーティングした「布あそび下駄」や、かかとの高い「ひーる下駄」など魅力的なデザインで話題を呼び、リピーターを増やしている。「下駄王子」の異名を持つ。



職人として日田下駄を作る傍ら、下駄のPRにも力を入れる。下駄の材料「木地」のやすりがけや、焼いて磨くことで木目を浮き上がらせる工程を主に担当しながら、完成品を県内外の物産展や観光イベントへ出品する。

日田で生まれ育ち、福岡市の専門学校に進学してパソコンや情報ビジネスについて学んだが、卒業後はすぐに日田に戻った。「地元が好きだった。日田に学校があれば出て行かなかったんだね」と。戻った当初は家業を継ぐ意志もなく、5年ほどは医療事務など別の職に。「ライフスタイルの変化や輸入品に押されて下駄が売れなくなっていて。両親は店をやめるつもりだったと聞きました」。しかし自然と店を

手伝うようになり、25歳で「3代目」を名乗った。

決めたきっかけを「まだ可能性があると分かったのが大きいかな」と振り返る。手伝いを始めたころ、客に話を聞いてもらおうと「奇抜な商品なら足を止めてもらえるかも」とエアブラシでカラフルに装飾した下駄を製作。狙いは当たり、少しずつ足を止める人やメディアの取材が増えた。「やり方を考えれば、まだ日田下駄はいける」と面白さを感じた。その後も客の意見や要望を取り入れながら新商品を次々と開発。「履きやすい」「下駄の概念が変わった」と評判だという。「お客さんとの距離が近いので、商品への反応がすぐ分かる」と仕事のやりがい語る。「日田下駄を喜んでもらえ

て、知名度も上がりつつあると思う。うれしいです」

ほどよい田舎であり、マイペースに生活ができる日田が好きだ。一方で「いい資源があるのに情報発信が少なく、良さが伝わっていないのがもったいない」という思いもある。日田下駄で踊るダンスチーム「日田もりあ下駄い」の設立に携わり、市内の情報をネット配信する「ALL BY 日田」の代表も務めるなど、地域おこし活動にも取り組む。

中高生へ「自分に合う職が見つかるまで、焦らずマイペースに探せばいい」とエールを送る。「一度都会を見るのもいい。自分の生まれ故郷と見比べて、どっちが合ってる方を選べばいいと思う。こればかりは、やってみないと分からないからね」

KAZUNORI HANDA

1971年生まれ。日田林工高卒。18歳で日田の劇団に入り演劇を始める。2009年に劇団「ソングライン」を立ち上げ、会社員として働きながら日田で年1回、公演。役者として県外の演劇にも出演し、ソングラインでは脚本・演出も手掛ける。

必死に遊ぶ、
世界は広がる



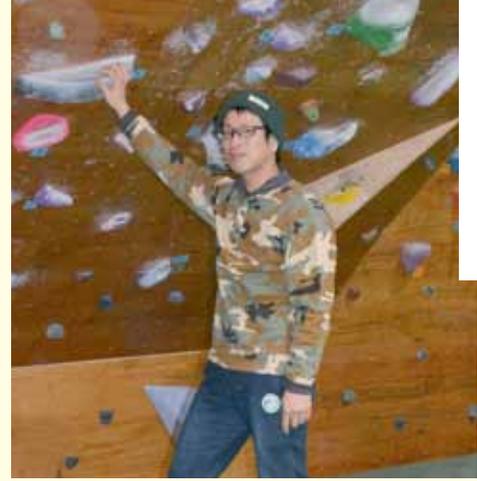
劇団代表
日田市大肥町
半田和則
〈45〉

高校時代に演劇を見たのがきっかけで、劇団に入りました。仕事もなるべく演劇がしやすい仕事を選びました。日田を出ようと思ったことも何度かあったけど、家族の病気などでタイミングを逸した。都会は苦手だし、結果的に日田が、ちょうど良かったんだと思います。演劇の脚本を考えるときは、運転しながら考えることが多いかな。亀山公園を散歩したり、三隈川を眺めたりするときもあります。「日田には遊び場がない」と言う人がいるけど、遊びは自分でつくるものだと思う。僕は「芝居」という場所で、30年近く必死に遊んできました。自分で動けば、世界は広がります。長続きしなくてもいいし、楽しそうだと思ったら、その世界に飛び込んでみる、いいと思います。

NOBUHIKO SHIMIZU

1983年生まれ。日田林工高卒。福岡市の内装工事会社を経て家業の住宅設備会社「清水住設」に入社。ガス配送を担当する傍ら2016年、日田市古金町にボルダリング(クライミング)とスケートボードの屋内施設「B-River」を開設。代表として競技の普及を目指す。

まじめに働き、
まじめに遊んで



ボルダリング施設代表
日田市三芳小瀬町
清水信彦
〈33〉

昼間はガス配送、夕方からはボルダリング・スケボー施設の代表として頑張っています。ボルダリングを始めたのは2年ほど前。「30歳を過ぎて何かを始めたい」と思ったとき、昔、本で読んで興味があったこの競技を思い出ししました。思ったより難しいのですが、少しずつコツがつかめるようになって楽しさも増してきます。趣味が仕事になっていっているようなものですね。日田は若者の遊び場が少ない、田舎だ、という声を耳にします。確かに都会ではないですが三隈川もあっておしゃれな店もある。だから日田はこのままであってほしい。若い人たちに願うのは、まじめに学んでまじめに遊んでほしいということ。まじめに働き、まじめに遊ぶ大人が多くなれば、その背中を見て子どもたちも見習う。そんな人たちがあふれるまちっていいですよ。

JUNKI YUASA

1987年生まれ。昭和学園高卒。熊本県内の福祉系大学に進み、日田市天瀬町桜竹の社会福祉法人大喜福祉会に就職。介護福祉士、社会福祉士の資格を持つ。法人が運営する特別養護老人ホーム「喜楽苑」から、現在は法人が市から委託を受ける「市南部地域包括支援センター」に勤務している。

迷わず地元に戻りました



社会福祉法人職員
日田市天瀬町
湯浅淳樹
〈29〉

小、中学生のときの職場体験で喜楽苑などを訪れ、お年寄りとの触れ合いが楽しかったことが福祉の仕事を目指すきっかけになりました。祖父母と同居していたこともあって、地域のお年寄りの支えになればとの思いがありました。もともと人混みが嫌いなので、大学卒業後は迷わず地元に戻りました。現在の仕事は高齢者の福祉相談の窓口。本人や家族に福祉制度の説明をしたり、認知症などの相談に乗ったりします。生まれ育った土地に誇りを持ち、住み続けているお年寄りの生活のお手伝いができることは幸せです。私は高校、大学と福祉関係を学んで地元に戻りましたが、いろんな経験をすることも大事。福祉の仕事はきついときもありますが、やりがいがあります。大学卒業後、地元へ帰ることを選択肢の一つとして意識してもらいたいです。

YU ANAI

1978年生まれ。日田高卒。アメリカの大学でデザインを学び、東京の出版社へ就職し書籍や雑誌のデザインを手掛ける。6年前に帰郷、日田を拠点にフリーのデザイナーとして活動する。無料情報誌「ヒタスタイル」の編集部員で取材・執筆や広告デザインなどを担当する。

何もないから、
チャンスがある



グラフィックデザイナー
日田市本庄町
穴井優
〈38〉

絵が上手だった父は普通の会社員でしたけど、時々、「イラストレーターになりたかった」と言っていました。デザインの仕事に憧れたのは、そんな父の影響があったのかも知れません。日田で働くようになったら、東京にはない出会いや経験がありました。面白い人が多くて、東京から戻ってもつまらないと思ったことはありません。日田には「何もない」という人もいますが、何もないからチャンスがある。福岡や大分じゃなくて、日田から新しい生活スタイルや文化が生まれたら、楽しいだろうなと思います。若い人には「なんかやってみよう」という気持ちで日田に来てほしい。私は日田の将来を悲観してなくて、きっとこれから、楽しいことが起こりそうな気がしています。

澄んだ空気も、
美しい水も、
山から生まれる。

HITA
PRIDE
PROJECT

KOJI ORII

1968年、福岡市生まれ。実業団やプロでラグビー選手として活躍し、1999年に前津江村に移住。木工職人として、店舗兼工房「おひさまとかぜ」で、世界の郷土玩具など木のおもちゃを制作・販売している。

理解して
ふるさとの魅力を



木工職人
日田市前津江町
折居 弘滋
〈48〉

ラグビーを引退するまで数年は福岡県宗像市と前津江を行ったり来たりしながら、木工もやっていました。前津江を選んだのは、たまたま手にした田舎暮らしを紹介する雑誌で見つけたから。当時の村長には「本気で住むなら四季を見て決めなさい」とアドバイスを受けました。春夏秋冬、何回も足を運んで決めました。前津江は水がきれいで自然が豊か。昔ながらの古き良き生活や人情が残っています。自分が良いと思っただころに住んでいるからストレスはないし、不向きも楽しんでいきます。日田の子どもたちには、自分の生まれ育ったふるさとの良さ、魅力を理解してほしいなと思う。自分のルーツとベースになった環境を知っていると、全く知らないのでは全然違うと思うかい。

AYUMI MORI

1974年生まれ。日田高卒。久留米市の専門学校で介護を学んで地元へ戻り、町内のデイサービス施設で3年間勤務。父親の文彦さんは梅栽培のカリスマとして知られる。23歳で転職し、家業の「森梅園・農園」で減農薬栽培など愛情込めた梅栽培を行うとともに、加工も手掛ける。

仕事をつつこよく
するのは自分



農業
日田市大山町
森 あゆみ
〈42〉

地元を出て行く人は誰しも家のことを考えると思うけど、私もそうでした。両親の助けになりたいと、家業を継ごうと考えていました。学生時代の部活で体力には自信があったし、農業でたえ休みがなかったとしても、嫌だとは思わなかった。小さい頃から梅の木の剪定や収穫した実の運搬など家の手伝いをしていて、介護施設に勤めているときも土日は家の手伝い。「働いてなんぼ」という思いがありました。同じ作物を作っても、農家によって味に差が出る。食べたお客さんの「あ、違うね」という反応がありがたいです。私は農業がすこくかっこいいと思っています。「仕事をこつこくするのは自分だ」と考えているので、皆さんもいろんな職業のいい所、大変な所にそれぞれ目を向けてみて。日田に今ある仕事を体験するのもいいと思います。

SHIN TAKAMOTO

1951年生まれ。日田高卒。大阪府で音響を学ぶ。実家の電気店手伝いや市内のレコード店勤務を経て、1971年に音響技術者(PA)となる。1973年に音響会社「MUSIC—CITY」を設立。地元の中津江村で1980年から続く「中津江ミュージックフェスティバル」を始めた一人。

何がどう動くかは
やってみると分かん



PA
日田市東有田
高本 伸
〈66〉

PAにはいつの間にかなっていました。コンサートを手掛けるうちにだんだん忙しくなって、仕事になった感じ。拠点を日田から変えなかつたのは、ツアーが始まれば全国を転々としてどこに住んでも関係がなかつたからかな。日田では音響や舞台芸術は特に仕事場が少ないし、地元の人活躍できていないのは残念です。今はネット環境などがあればどこでも仕事ができる。「日田から全く出て行かない」というのも井の中の蛙になってしまったので、外で面白い物、ちゃんとポリシーのある物を見てから戻って来ては、とりあえずやってみようという思いを大切にしたい。何がどう動くかはやってみると分かんからね。

KENJI MITSUMATSU

1949年生まれ。日田三隈高卒。福岡県の大学へ進学、1972年に実家の「みつまつ塗装」を継ぐためUターン。一般住宅から文化財まで、さまざまな現場を手掛ける。熟練した伝統技術を持つ「ひた伝統技能マスター」にも認定されている。

信頼される
人間になれ



建築塗装業
日田中央二丁目
三松 健次
〈67〉

学校の先生や会計士になろうかと考えたこともありましたが、継ぐ人は現実的に自分しかないなかつたので戻ってきました。住宅はもちろん、咸宜園跡にある秋風庵や草野本家など、文化財を保存修理する際の古色塗装もします。生まれ育った地元には愛着があるし、知人が多く人とのつながりがあるのは一つの宝です。職人にとって大切なことは技術の裏付けと安心感、人間性、信頼をおけること。職人の最高の喜びは施主の喜びといっしょの喜びです。適正価格で、質を落とさずいい仕事を終えたときに達成感を感じますね。若い人には「人よりも光る技術者に、信頼される人間になれ」と伝えたい。どんな仕事にも技術は役立つし、信頼があれば仕事は続く。職人の世界だつて怖くない。できれば飛び込んで来てほしいですね。

通る人は変わっても、
通る風は変わらない。

HITA
PRIDE
PROJECT

ARIKA TANABE

1975年、北九州市生まれ。福岡市育ち。福岡県内の大学卒業後に2年間、イタリアに留学。いったん帰国した後に再びイタリアに渡り、14年間、翻訳の仕事をした。料理を学んだりして過ごした。2011年、イタリア人の夫や子どもと福岡市に戻り、2015年に大山町に移住。2017年4月、町内にピザやラザニアなどを主とするイタリア料理店「ラ ターナ」を出店する。

緑と温かい人に囲まれ



イタリア料理店経営 日田市大山町 田邊 亜吏可 <42>

「自然に囲まれた場所で暮らしたい」という夫の希望で大山町に移住。家は畑付きなのに安価で私の家族が住む福岡市も近いことが決め手になりました。生活の不便さはありませんが、子どもたちも伸び伸びと過ごし、咲く花や旬の味覚に季節を感じて、天気がいいとうれしくなる、そんな田舎暮らしを楽しんでいます。この春に店をオープンさせますが、自分の料理やお菓子をおいしいと言っていたときが一番の喜びですね。若い人たちは一度、市外に出ることをお勧めします。田舎にしていると都会に憧れますが、いろんな場所で行きな経験をする大切なものが何か見えてくると思うから。私はビル街よりも緑の自然に、無関心の人たちより世話好きの人たちに囲まれた、この場所が好きです。

NORIKO IWAHASHI

1988年生まれ。日田高卒。広島県内の大学を卒業後、福岡市の広告デザイン会社の営業などを経て2016年に帰郷。日田市南友田に本社を置く総合物流サービス会社「NBSロジソル」に入社。人材開発室で大学生の新卒採用や広報などを担当する。

日田の魅力に気付いて



運送会社社員 日田市内新町 岩橋 典子 <28>

大学卒業後、福岡市などで社会人として暮らして5年。ごみごみした都会より、ふるさとで暮らしたいという思いが強くなり、母が体調を崩したこともあって帰郷を決意しました。自然の豊かさ、特に日田を出て初めて「こんなに日田の水はおいしかったのか」と気付いたんです。現在、採用担当として九州や関東の大学を回って学生に会社の魅力を伝えていますが、学生に「御社に決めました」と言われたときはうれしかったですね。高校卒業当時に比べ、日田は若い人がずいぶん少なくなりました。日田に残りたい」「一度は出たけどやっぱり帰りたい」と思えるまちづくりや、子どもを安心して生み育てられる環境づくりが必要なのかもしれない。そして若い人には、豊かな自然など日田の魅力に気付いてもらいたいですね。

SHINYA HORIUCHI

1967年、福岡県朝倉町（現朝倉市）生まれ。同県の大学を卒業後、アルバイト生活しながらシーカヤックによる単独航海などをして生活。2000年に結婚したのを機に日田市へ移住。2010年から日田市中城町で喫茶店「アラスカンカフェ」を営む。

日田から、世界に挑め



カフェ経営 日田市三本松二丁目 堀内 信也 <50>

大学生のときにカヤックと出会い、卒業後もバイトで金をためては、国内や海外で川や海の単独航行に挑戦してきました。結婚して日田に来た直後、目の難病にかかって将来が不安になったときもあつたけど、克服して2007年には、手製カヤックでアラスカ・カナダ沿岸水路1800キロの縦断を達成しました。念願だったのでうれしかったです。旅先でも、日田でもたくさんの人に支えられました。カフェをやりながらでも、いつかまた旅をしたいからトレーニングは欠かせません。アラスカの容赦ない自然も好きだけど、優しく包むような日田の自然も良い。10月の朝、三隈川から見る朝焼けは絶景ですよ。若い人には安定もいろいろ、リスクを取ることも面白いよ、と伝えたい。日田からでも世界に挑むことは可能だよ、と。

KIYOTAKA KOGO

1967年生まれ。日田高卒。埼玉県内の大学に進学。福岡市での宝石販売やダンス用品メーカー勤務を経て2003年に帰郷。2007年にはダイニングバー「ステップス」をオープン。2017年春、限に2店目となる「ステップスカラー」を開いた。2010年からは音楽好きの仲間と野外フェス「ボンチ・サウンド・フェノメン」を開催する。

一生の友、見つけて



飲食店経営 日田市隈一丁目 古後 清尚 <50>

限で生まれ育ったせいか、飲食店には昔から興味があり、帰郷してまもなく店を始めました。目指したのは「自分が行きたい店」。それは大好きなジャズやソウルミュージックが静かに流れる店内で、ゆつくりお酒とおしゃべりを楽しめる店です。野外フェスを始めたのは、音楽好きのお客さんとの会話がきっかけ。好きな音楽を通して少しでもまちの活性化につながれば、との思いでしたが今では数百人が集まるようになりました。来場者の6、7割は福岡からで、少しは日田のPRになっているのかなと思っています。帰郷して思うのは、いつも中学、高校時代の仲間たちに支えられてきたということ。日田の仲間意識の強さです。うね。だから今の中高生にも、たまにはけんかをしてほしい、腹を割って話し合い、一生付き合える友人を見つけてほしいと思いますね。

HATA
PRIDE
PROJECT



代々つづいてく。



子どもたちを想う気持ちは、

YOSHIMI SUGIMORI

1967年生まれ。日田高卒。大分市の美容学校へ進学後、福岡市で美容師として働く。結婚を機に日田市へ戻り、飲食店経営などを経て2014年夏にゲストハウス「やすらぎ」をオープンした。

旅人と日田の日常をつなぐ



ゲストハウス経営 日田市隈二丁目 杉森良美 <49>

米テキサス州の若者と日田の子どもが互いに行き来して交流するイベント「日田夏の冒険」「テキサス春の冒険」などの国際交流を続けています。世界平和を理念に、子どもたちに国際交流の機会をつくりたくて。私がやるべき仕事は、旅人と日田の日常をつなぐこと。日田は川も山もあるたすまじがいいですね。特に三隈川は、ガンジス川にもセーヌ川にもひけを取らない。各国から旅慣れた人たちがこの小さな宿を目指して来て、「湯布院より、別府より、京都より日田が一番いい」と言ってくれる、その一言がこ褒美みたいなものです。世界中の友だちが集まって交流する「基地」がほしくてゲストハウスを始めましたが、自分のやりたいことを形にしたいだけ。やりたいことを実現すれば、それが職業になると思います。頑張ってます！

KOICHI KIMURA

1943年生まれ。滋賀県長浜市出身。滋賀県内の高校などを経て、京都市内で農業指導を行う法人に就職、しいたけ栽培に携わる。1998年に天瀬町桜竹に移住し、生しいたけの生産、販売「キムラきのご園」を開始。2008年ごろからはしいたけ狩り体験なども始めた。

農林業の可能性を知って



しいたけ農家 日田市天瀬町 木村紘一 <74>

天瀬町に移住したきっかけは、知り合いの農家がいたこと、しいたけ栽培に必要なクヌギの原木が豊富なこと、そして「花と温泉と祈りの町」というキャッチフレーズが気に入ったから。栽培しているのは、乾しいたけ用ではなく生しいたけ用の品種。健康にもいい山の幸の本当のおいしさを一人でも多くの人に知ってもらおうと、しいたけ狩りや食べ比べといった体験も行っており、体験で食べた人から「食感が全然違う」「おいしい」と言われたときはうれしいものです。農林業の経営には厳しさもありますが、生産するだけでなく加工や販売まで手掛ける6次産業化や、観光面での活用など、知恵を絞れば可能性は大きく広がると思えます。日田の若い人には、地元には豊かな自然に支えられた農林業という基幹産業があるということを知ってほしいですね。

KUNIO ISHIMARU

1943年生まれ。日田高卒。大分市の食品会社で2年ほど勤務しUターン。「日田天領まつり」の発起人であり「天領日田おひなまつり」の仕掛け人の一人。市観光協会の会長も務めた。日田市豆田町の「珈琲談議所 嶋屋」の店主。

たくさんの方が交流する場所に



飲食店経営 日田市丸山一丁目 石丸邦夫 <73>

Uターンして実家に戻ったとき、どこかに勤めようという考えはなくて「何かやらないと」と、1967年に三本松で最初の喫茶店を出しました。飲食店なら現金収入があるし、コーヒーが大好きだったので。商売はお客さんが来てくれて初めて成り立つ。人に来てもらうためにはどんなまちにしたらいいか：そんな思いをきっかけに、まちづくりについて考え始めました。自分の生まれ育ったところを考える機会ができたのは本当に良かった。日田には最近頑張っている若者が増えてきたけど、自分たちのまちを自分でつくるのだという自発的な動きがもっと広がってほしい。中高生の皆さんにはふるさとに残って、自分の生まれ育ったまちをよく学んでもらえればうれしい。良さを最大限に生かしながら、たくさんの方が交流する場所にしてもらいたいです。

MINORU SATO

1951年生まれ。北部中卒。日田市内の建築会社へ弟子入りして大工の世界へ。「建築みのる」代表。木材を複雑な形に削りくぎを使わず組み合わせる「継手」など伝統工法に精通し、市内の文化財や伝統的建造物の保存修理に多く携わっている。2016年に「現代の名工」に。

大学院を出てからでも職人になれる



大工 日田市上手町 佐藤実 <65>

高いところで仕事をする大工の姿がかっこよくて、将来は自分の手で家を建てたいと大工を志しました。市内には腕のいい棟梁も多くいました。一般住宅の建築と文化財の修理をしますが、自分の仕事は建物として未永く残るし、お客さんに引き渡してすぐ喜んでくれたり、未永くお付き合いができたりますとうれしい。どちらもありがいにあふれています。大工や左官などの職人は絶滅危惧種です。しかし現在は高校、大学と進学するのが普通で、なりたいた人は大学院を出てからでも職人になれる時代。それはいいことです。皆さんもぜひ職人になりませんか。手に職をつけること、技術を身につけることは生活していくうえでプラスになります。

人の想いで灯る
夜景がある。

HITA
PRIDE
PROJECT

RYOTA ISAYAMA

1988年、福岡県うきは市出身。同県内の高校、医療福祉系の専門学校を経て同県久留米市の会社で4年間、障害者の就労支援に携わる。社会福祉士と精神保健福祉士の資格を生かし2014年8月から、日田市の社会福祉法人「平成会」に入り、法人が市から委託を受ける「市西部地域包括支援センター」に勤務している。

もっともって
魅力あるまちに



社会福祉法人職員 日田市日ノ出町 諫山 亮太 <28>

社会福祉法人職員 日田市日ノ出町

日田で働き始めたのは、二つの資格を生かせる職場があったことが大きいですね。今の仕事は高齢者が地域で生活していけるように相談に乗ることです。祖父と父が亡くなり、祖母と母の3人で暮らしていますので、パートナーを亡くした人の不安や悲しみは理解できます。これからお年寄りもしっかりと寄り添って支えていければと思っています。日田にはバンド活動をしていた高校時代からよく通っていました。とにかく面白いイベントが多く、若い人が歴史を受け継ぎながら新しいものに挑戦している。もっともって魅力あるまちにするために中学生、高校生たちには、広い視野でさまざまなことに興味を持って、そこで得た知識や経験を日田で生かしてほしいと思いますね。

GO SETOGUCHI
KAYO

剛さんは1976年生まれ。日田高、神戸市の大学を卒業後に上京して飲食業や映像製作業などを経験。かよさんは1978年生まれ、東京都世田谷区出身。都内の高校、調理系の専門学校を卒業後、料理教室に就職。2009年に結婚、2014年に日田市へ移住して翌年1月にカフェ&バル「bajio(バヒーオ)」をオープンした。

やらずに終わるのが
一番損



飲食店経営 日田市丸の内町 瀬戸口 剛 かよ <38><40>

飲食店経営 日田市丸の内町

bajioを運営しながら、家具や看板などの商品開発、映像製作の仕事もしています。もともと日田を拠点に活動したい思いがありました。東京は広く浅く混沌として、その中にいろいろな人や物がある。個性の確立が難しいんです。仕事はどこでもできるし、子育ての環境としても良かったので日田へ移りました。料理を作るのが好きだし、店をやっていると地元の人や観光客などジャンルを問わない人と会えて話が聞けて楽しいです。中高生の皆さん、安定が大切だと言われているかもしれないけど、やりたいことをやった方がいい。やらずに終わるのが一番損だと思う。やってみて合わなかったら軌道修正すればいいし、何でもいから一生懸命やったら次が見えてくるはずだから。

SYOJI SASAKI

1965年生まれ。日田林工高卒。福岡市にある建築系の専門学校で2年間学び、20歳で帰郷。家業の「佐々木鉄工」を受け継ぐとともに、2級建築士の資格を生かして「佐々木建築士設計事務所」を開設。本業の傍ら日田市の歴史発見講座「伊藤塾」の事務局次長も務め、日田の歴史の啓発に努める。

日田は豊かな自然と
文化・歴史の桃源郷



鉄工業 日田市石井町 佐々木 祥治 <52>

鉄工業 日田市石井町

仕事は建築や機械の修理などが主。働く両親の姿を見てきたせいか、昔から家業は継ぐものと思っていましたね。全体の仕事量も減り、大手も進出する中で経営環境は厳しいですが、お客さまの信頼をなくさず、「佐々木さんじゃないとだめだ」と言われるよう努力しています。伊藤塾には歴史で日田を輝かせたいの思いで参加しています。古代史、特に邪馬台国に興味があり、日田でゆかりの鉄鏡が出土していたと知って「層」ふるさとに光を当てたい」と思うようになりまし。私は、豊かな自然と文化、歴史がある日田を「桃源郷」と思っています。だから若い人には、市外で暮らしても生まれ育った日田を誇りに思ってもらいたいですね。そのためには日田を知ることが大切。そうして郷土愛が育まれば、いつかは日田に戻りたいと思えるのではないのでしょうか。

MANABU SATO

1963年生まれ。日田高卒。大分市の大学を卒業後に同市、広島県、東京都で7年ほど食品会社へ勤務し、31歳で前津江村へUターン。村社会福祉協議会や村営キャンプ場に勤め、36歳で家業の林業を継ぎわさびの栽培も始めた。

やりたいことができ
なんでもできる



林業・わさび農家 日田市前津江町 佐藤 学 <53>

林業・わさび農家 日田市前津江町

自分の家の山を自分で手入れして伐採、再造林をしていく自伐林業を代々続けています。家を継ぐというよりは「ふるさと」のことで何かしたい」という思いが強くて、行き着いたのが結局林業だったという感じです。林業は植えてから伐採まで数十年かかるため、短期で収入につながる農業も始めました。一番うまく林業とマッチングしたのが林間で作るわさび。葉や茎のほか、清流で根を大きく育てる沢わさびも作っています。自然相手なこともあって、正直なところ農林業でやっていくのは難しい。でも相談に乗った新規就農者の栽培がうまくいったことなど、楽しいこともありま。自分が生まれ育ったところには過去の蓄積という目に見えない財産があり、捨てるのはもったいない。ふるさとが好きで帰ってきたし、やりたいことがなんでもできる今の自分の生活が気に入っていますね。

何気ない景色が、
時を経て、
情景になっていく。

HITA
PRIDE
PROJECT

HIDEKAZU AIZAWA

1951年生まれ。日田林工高卒。愛知県内の会社に就職、19歳で帰郷した。蒔絵(まきえ)師だった父の背中を追い、漆芸の世界に入る。日田市豆田町で漆器店「相澤漆芸工房」を経営する。

若い人が魅力を感じる
仕事をしたい



漆芸職人 日田市三ノ宮町
相澤 秀一 <65>

かつて日田の一大産業として栄えた日田漆器も、私が始めたころには斜陽産業になっていました。それでも、この仕事に就いたのは蒔絵師だった父の背中を幼い頃からみていたのと、黙々と作業する職人の仕事に性に合っていたからです。器をひとつ作るにも漆を何度も塗って、完成は約1カ月後。気の長い仕事です。漆は縄文時代から使われていたと言われる塗料で、いろいろなものを作ることができる。年を重ねるごとに、もっと良い物を作りたいという思いが強くなっています。かつて、日田にもたくさん漆芸職人がいました。でも、今では私くらいじゃないかな。全国的にも職人は減っている。後世に残さないといけない仕事だと思ふから、若い人がやってみたいと思うような魅力的な仕事をしていきたいですね。

FUMIKO OKAYAMA
KAZUE SHIBANAKA

岡山富美子さん 1956年、日田市天瀬町生まれ。兵庫県姫路市の高校を卒業後、関西で過ごす。2014年、両親が住む天瀬町に帰郷。柴中和江さん 1975年生まれ。日田三隈高から福岡市内の短大に進学。20歳で帰郷。2人は2015年に出会い「天瀬を元気にしたい」と意気投合。JR天ヶ瀬駅前に2016年6月、和風喫茶「Azuki(あづき)」をオープン。店では定食やロールケーキなどを提供するほか、地元産の農産物や雑貨を販売する。

自分の意思で人生歩んで



和風喫茶オーナー 日田市天瀬町
岡山 富美子 <60>
柴中 和江 <41>

大好きな天瀬で自分たちも楽しみなから、まちをにぎやかに、笑顔にしたい。そんな思いが2人の出会いを生み、店という形で実現しました。店では定食やスイーツを提供するほか、町内産の農産物や加工品、雑貨なども販売。駅前だけに町内の人だけでなく、観光などで遠くから来る人も多く、そんな人たちと触れ合う毎日にやりがいを感じています。天瀬のいいところは自然の豊かさや人柄の良さ。人と人がつながり、広がっていくのはこの人柄の良さのおかげでしょう。中高生の方たちは、とにかく楽しみなから日々を過ごしてほしいと言いたいですね。でも「楽しい」と「楽しい」は違いますよ。人の責任にせず、自分の意思で人生を歩んでほしいんです。あきらめずに何かを追いかけていると、きつといい巡り合わせがやってきますよ。

MASATAKA KAWAI

1973年生まれ。2012年に生まれ育った大阪府から、日田市の地域おこし協力隊員として、中津江村に移住。2015年からは集落支援員として活動。2016年の熊本地震後、被災地で農業ボランティアなど復興支援に取り組む。行政と被災者をつなぐ支援団体「ふるさと発 復興会議〜九州・熊本」の議長を務める。

人生は一度、
思いっきり楽しもう



熊本地震復興ボランティア 日田市中津江村
河井 昌猛 <43>

田舎で暮らしたいと、九州で地域おこし協力隊員の募集を探していた見つけたのが中津江村でした。集落支援員を経て、2016年の熊本地震後は被災地復興の手伝いをしています。たまたま知人に頼まれて被災地の熊本県西原村に入ったのがきっかけでした。ボランティア希望者と農家とのマッチングなどに取り組みました。全国からボランティアが被災地に来て被災者と交流し、両者が喜び楽しく話をする姿を見るのがうれしいです。ただ、上・中津江はおいしい農産物が多い。手作りこんにやくも絶品です。中高生の皆さん。度は大都会と言われるところで見聞を広めた方がいいでしょう。それから自分の進む道を考えてもいい。一流の大学・企業に行くだけが人生じゃない。人生は一度きり。思いっきり楽しんでください。

YOSHIKI MATSUOKA

1990年生まれ。日田林工高卒。大分市や三重県四日市市で会社員として働いた後、2015年に帰郷した。家族とともにシャインマスカットや種なし巨峰などを栽培している。

日田で刺激しあう
仲間がほしい



ぶどう農家 日田市君迫町
松岡 義樹 <26>

就職したときは日田に戻る気はあまりなかったですね。でも大分市から三重県に異動したとき、友達とのLINE(ライン)の中で日田の話が飛び交っていると恋しくなってきました。特に自分も参加していた日田祇園の季節になると「帰りたいな」という気持ちが強くなりました。次男でしたけど、きょうだいも戻らないだろうし、還暦を迎える父親のことも考えて7年勤めた会社を辞めて帰郷しました。これまでエアコンの効いた環境で仕事をしていただけ、農業は汗をかいて泥だらけになりながら仕事をやる。生きていく感じがするし、それを乗り越えて収穫を迎える喜びは大きいです。すごくやりがいがありますよ。同年代で農業をやっている人は少ないから若い人が日田に帰ってきて、良い意味で刺激を与えてほしい。切磋琢磨できる仲間がほしいですね。

ふるさとへの愛が、
祭りをもっと、
華やかにする。



HATA
PRIDE
PROJECT

開花宣言を待たずに、
見頃を迎える日田の花。

KYOKO YOSHITOMI

1976年生まれ、熊本県阿蘇市出身。鹿児島県の高校を卒業後、阿蘇市などで保育所や障害者支援施設、旅行会社へ勤務。2006年に結婚して日田市へ引っ越し、夫が経営する「吉富産業」へ。2009年から代表取締役。民謡の唄い手として全国大会で数々の優勝歴がある。

日田は不思議で面白いまち



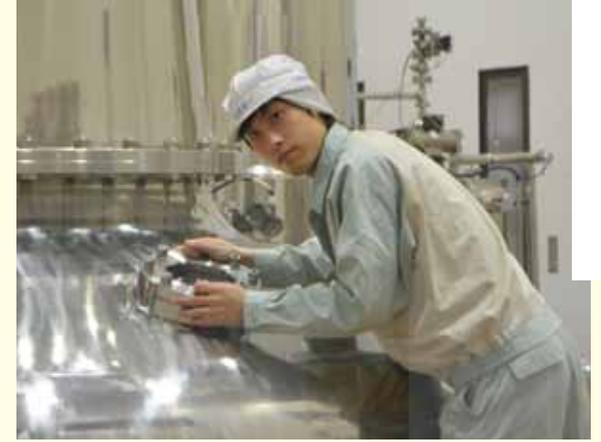
ガソリンスタンド経営 日田市三本松二丁目 吉富 今日子 <40>

保育士をしていましたが、進路を変更して旅行会社に勤めました。今も旅行業は続いているほか、市内で民謡教室も開いています。ガソリンスタンドは何も分らないところから始めてオイル交換やタイヤ組み替え、経理や仕入れなど、仕事をすべて覚えめました。笑顔で気持ちを込めて接客するとお客さんが笑顔になってくれるのがやりがいですね。外から来て分かるのですが、日田は不思議で面白いまち。頑張っていて魅力ある人たちがいっぱいいます。学生の頃は気付かなくても、1回外に出て帰ってみれば、ほっとする気持ちをふと感じることがあると思う。中高生の皆さん、何事に対してもやる前からできないと思わず、挑戦してみてください。たとえ失敗しても、失敗したからこそ見えてくるものがあるはずですよ。

YUKI KANEYAMA

1989年生まれ。日田林工高卒。酒造会社「三和酒類」に就職。宇佐市の本社工場を経て2008年から日田市の「いいちこ日田蒸留所」に異動。現在は「蔵人」として、麦焼酎の製造を担当。「味、香りを兼ね備えた最高の焼酎」造りを目指す。

地域のこと、もっと知って



酒造会社蔵人 日田市内新町 金山 友貴 <27>

もの作りが好きだったこと、少しでも生まれ育った地元に貢献したかったことが三和酒類を選んだ理由ですね。父の仕事（飲食店）の影響もあってお酒にも興味がありましたし。入社10年。現在は蒸留する前段階で、焼酎タンク内の温度にむらが出ないようにしたり、発酵を促したりするなどの管理を行っています。この仕事に携わるからには、飲んだ人においしいと言われ、飲んだ人においしいと言われることが何より。飲みに行った店でそんな声を聞くと本当にうれしくなりますね。若い人たちに言いたいことは、地域のことをもっと知ってほしいということ。そのためには中高生が地元の祭りやイベントに参加したり、特産物を販売したりする機会がもっとあればいいと思います。ふるさとを知ることがふるさとへの愛着にもつながりますから。

TETSUYA HIYAKAWA

1987年生まれ。日田三隈高卒。県立農業大学校に進学。東京で就職したが、約8年前に帰郷し就農した。地元の「農事組合法人 小野谷」に所属し、田植えや稲刈りの時期は大型の農業機械を扱うオペレーターとして活躍する。

「帰りたいたい」と思える日田にしたい



トマト、キュウリ農家 日田市殿町 冷川 哲也 <29>

農業大学校を出た後、飲食業界の会社に入って、東京の飲食店で働いていました。その会社でやってみたいことがあったけど休みがほとんどなく、心も体も疲れて日田に戻りました。それで家業の農業を手伝うようになりまし。この話をする「農業も休みがないじゃないか」と言われるけど、農業はやればやった分だけ自分に返ってくる。頑張った分だけ結果が出る。だから、楽しいですよ。自分が作った野菜を「また食べたい」と言ってもらえるとうれしいです。日田は自然があるし、水がおいしい。何より人が温かいな、と感じます。若い人が「帰りたいたい」と思えて、日田に住む人が「出て行きたくない」と思う。そんなまちなしたいし、なってほしいな。

MASAHIKO NISHIOKA

1976年生まれ。藤蔭高卒。2000年、仲間2人とまちづくり団体（現・日田ブレイス）を設立。「日田いち」（8月を除く4～11月の第2日曜日開催）をはじめさまざまなまちおこし活動に取り組む。2001年からケーブルテレビ局「KCVコミュニケーションズ」に勤務、営業を担当している。

面白く、夢が実現できるまちに



ケーブルテレビ局社員 日田市玉川町 西岡 政彦 <41>

オーストラリアや東南アジアを旅し、人種や文化が混ざり合う各地のマーケットを見て熱気、活気に感動。「自分の生まれ育った日田でもまちづくりがしたい」と思うようになり、帰郷を決意しました。「日田いち」で定期的に集まるようになると人とのつながりも広がり、个性的な人とも知り合える。それがこの活動の醍醐味ですね。現在の仕事を選んだのも、人と人とのつながりを大切にしながら、地域に密着した情報を伝えることに魅力を感じたから。日田に住む人はもちろん、市外から訪れた人も、外国の人も、障がいがある人も気楽に集えて面白く、それぞれ抱く夢が実現できる。日田がそんなまちになってほしいですね。

原茂樹

<40>

大事な人、
大事なふるさとのために
生きるのもいい



SHIGEKI HARA

1976年生まれ。日田高卒。映画や音楽に魅せられ、福岡市内でバンド活動を行い、レンタルショップやカメラ店でのアルバイトを経験。2009年に帰郷し「日田シネマテーク・リベルテ」のオーナーに。63席の小さな映画館にはカフェや全国のアーティストの作品展示コーナーがあり、多彩なイベントも開催するなど、ユニークな取り組みで知られる。



コーヒーを飲みながら映画を鑑賞。ロビーにはシャツや本、CD、焼き物などがずらりと並び、上映作にちなんだイベントや陶芸家によるワークショップ、音楽ライブなども開かれる。日田唯一の映画館「リベルテ」はフランス語で「自由」を意味する。それだけに、訪れる人もそれぞれの思いでゆったりとくつろいでいるようだ。「たくさんの人でにぎわう場所じゃなくていい。ここに来る一人一人が、明日も頑張ろうと思えたり、気持ち晴れたり、ほっとしたりしてくれる。そんな場所になつたらいいですね」

大学受験のため京都に向かう列車の窓に映った光景が心の転機になった。外にはブルーシートに覆われた家々。1995年、阪神大震災直後の被災地だ。眺めているうちに「生きるって何だろう」とふと思った。周囲に勧められ、一時は教師の道を目指した。受験はその第一歩。「でもこんな思いを抱いても思い切つて列車を降りられない人間が、人に教えることができるのか」「自分のためだけに生きていいのか」。もやもやはずつと心に残った。「みんなと違っていい。自由な生きてみたい」。思いは日がつごとに膨らんでいった。

日田は歴史や自然が物語るように素晴らしいまち。この心地よい環境、風情を失ってほしくないと思う。だからこそ大きな施設を造つたりして人を「集める」のではなく、人が「集まる」まちになつてほしい。そんなまちづくりのリベルテも一役買うつもりだ。「自分が大事という人も多いけど、大事なふるさと、大事な人のため生きてもいい。これまで好き勝手にやってきた人生だから。これからは人のために頑張ってもいいかな」。

HITA PRIDE PROJECT

日田にはこんなにも日田を  愛する人たちがいるということを知ってほしい。
日田にはこんなにも素晴らしい  があるということを知ってほしい。
都会へ進学しても、就職しても、
日田で生まれ育ったということに誇りを持ってほしい。
そんな願いから生まれたプロジェクトです。



日田市役所
公式 Facebook



日田市
プロモーションサイト



日田市役所
公式 YouTube

遠くにいても、いつもそばにいるよ。
いつでもふるさとを思い出して。



「日田(ヒタ/ヒト)」HITA PRIDE PROJECT VOL.2

平成29年4月1日 発行

発行 日田市企画振興部 ひた暮らし推進室
〒877-8601 大分県日田市田島二丁目6-1
TEL 0973-22-8383 FAX 0973-22-8324
編集・制作 西日本新聞社 大分総局 株式会社 西広
印刷 株式会社エポックアート